

日本中世禅林における杜詩受容

―杜詩の援用について（中期の場合）―

（人文・社会科学 漢文学研究室） 太 田 亨

はじめに

筆者は日本中世禅林中期（南北朝時代末期から応仁の乱頃）において、禅僧が杜甫に関する事項をどのように自身の作品に詠出していたかについて考察し、すでに以下の観点について論じた。

一、禅林の宗旨に対して外集習得のあり方を説く場合に杜詩句を利用していったこと。^①

二、杜甫に関する画図が種種描かれ、そこに着賛していたこと。^②

三、禅林の組織が貴族化の中で、杜甫の情に着目していたこと。^③

四、武家と禅林の関係が密接化の中で、杜甫の忠孝に着目していたこと。^④

五、秀逸な詩を作製するために、杜甫の困窮像に着目していたこと。^⑤

六、秀逸な詩を作製するために、杜甫と自然との関係に着目していたこと。^⑥

七、杜詩句中の禅的要素に着目していたこと。^⑦

以上のように、中期になると、禅僧は杜甫の人間像や杜詩の特定の要素に着目し、それらを自身の作品に詠出した。しかし、一方で上記の観点以外でも、禅僧は様々な場面で杜甫の人間像及び杜詩句を自己の作品に詠出している。

初期（鎌倉時代末期から南北朝時代末期）において、既に夢巖祖応（？～三七四）や中巖円月（三〇〇～三七五）といった禅僧は、杜詩句に関連した場面が眼前に現れると、即座にその詩句を作品中に援用し、周囲に自身の博識ぶりを披露していた。^⑧ 初期においては夢巖や中巖といった限られた禅僧が杜詩句を援用して自身の作品に詠出していたが、中期になるとどのように変化したのであるか。本稿では、中期の禅僧がどのように初期の傾向を継承し、杜詩句を自己の詩文に援用していたかを検討する。

一、杜甫の名が直接に詠出されている場合

（一）字号の付与（字説など）

禅僧の道号を「字」といい、その「字」の意味するところを解明して、その僧の向上事に資し、その遠大を期する意をこめて記されるのが「字説」である。字説に杜詩句が引き合いに出されることは初期より既に行われていた。^⑨

中期において翱之慧鳳（生没不詳）は「揚伯序」（『竹居清事』）で次のように述べている。

今聞諸孫有美、孰不籍黄花而思徵君乎。遂不獲嘿、輒取之老杜惟揚一俊人

之句、命以揚伯。

今 諸孫に美有るを聞くに、孰か黄花を籍しるさずして徵君を思はんや。遂に嘿するを獲ず、輒ち之を老杜の「惟揚一俊人」の句に取り、命ずるに揚伯を以てす。

翱之は「揚伯」の字号を付けるに際し、杜甫の「奉寄章十侍御」詩の「淮海維揚一俊人、金章紫綬照青春」（淮海 維揚の一俊人、金章 紫綬 青春を照らす）句を典拠にしている。杜甫が章彝の才徳を褒め称えた詩句から字号を命名している。

惟肖得巖（三六〇、四三）は「伯清字説」（『東海瑤華集』）で次のように述べている。

老杜詩云、在山泉水清、出山泉水濁。一時有所指而言、非千載通論也。夫泉在山也、儲深湛碧。出山也、流惡蕩氣。其清一也。

老杜詩に云ふ、「山に在れば泉水清し、山を出づれば泉水濁る」と。一時指して言ふ所有るも、千載の通論に非ざるなり。夫れ泉 山に在るや、儲たくはへ深くして湛碧たり。山を出づるや、流れ悪くして蕩氣たり。其の清一なり。

惟肖は「伯清」の字号を命名するに際し、杜甫の「佳人」詩の句「在山泉水清、出山泉水濁」（山に在れば泉水清し、山を出づれば泉水濁る）を典拠にしている。杜甫は、泉が山より流れ出していないときは澄んでいるが、山を出れば汚れてしまう、という。惟肖はそれなりに理解しながらも、その根本の清らかさは変わっていないとすることを指摘している。人間は世俗に紛れ込むと、一見汚れたように見えるが、その心の根本は清らかであることを伝え、受号者が清らかさを取り戻すことを期待し、字号を付けたのであろう。

惟肖得巖は「叔寶字銘」（『東海瑤華集』）で次のように述べている。

東山珠上人、就予索副諱。礼曰、冠而字之、敬其名也。請以叔寶命之。老

杜云、僧寶人々滄海珠。夫采之法海、秘之僧苑、祝字期望所屬也。而晋衛玠字叔寶、世称玉潤、二字連舉。亦非予創意。乃製銘文、鄭重訓辭。

東山の珠上人、予に就きて副諱を索む。『礼』に曰ふ、「冠して之に字し、其の名を敬ふなり」と。叔寶を以て之に命ぜんことを請ふ。老杜云ふ、「僧寶にして人々 滄海の珠なり」と。夫れ之を法海に採り、之を僧苑に秘し、字を祝して期望の属する所なり。而して晋の衛玠字は叔寶、世に玉潤と称せられ、二字連舉す。亦た予の創意に非ず。乃ち銘文を製りて、訓辭を鄭重にす。

建仁寺の珠上人が惟肖に副諱を求めている。惟肖は副諱を述べるに際し、『礼記』に「三加彌尊、喻其志也。冠而字之、敬其名也」（三加して彌々尊きは、其の志を喻すなり。冠して之を字するは、其の名を敬するなり）とあり、命名の重要性を指摘する。その上で、「叔寶」の「寶」について、珠上人の「珠」と関連させて、杜甫の「岳麓山道林二寺行」詩の句「地靈步步雪山草、僧寶人人滄海珠」（地靈にして歩歩 雪山の草あり、僧寶にして人人 滄海の珠なり）を拠り所にしたことを言う。この杜詩の句意は、岳麓山の寺と道林寺の地が修行に適し、そこで修行する僧が三寶の一つで、滄海から拾った真珠のようであるという。そして晋の時代の衛玠が叔寶と言ひ、世に玉潤と称えられていることも踏まえて「叔寶」と名付けている。

東沼周巖（三五二、四三）は「廷梁説」（『流水集』卷五）で次のように述べている。

惟梁而可用之才、奈云何哉。在左氏賦、木則楓柟豫章。在杜陵詩、豫章飄風白日動。由是言之、用材於明堂、致美於輪焉免焉者豫章。且夫聖人以天下為家、以賢材為梁。

惟れ梁にして用ふべきの才、云三に奈何ぞや。左氏の賦に在りては、「木は則ち楓柟豫章」と。杜陵の詩に在りては、「豫章 風に飄りて白日

動く」と。是れに由りて之を言へば、材を明堂に用ひ、美を輪・奩に致す者こそ豫章なり。且つ夫れ聖人は天下を以て家と為し、賢材を以て梁と為す。

「廷梁」号を付けるに当たり、まず豫章が左思の「呉都賦」に「木則楓柟豫章」（木は則ち楓柟豫章）とあり、次いで杜甫の「短歌行贈王郎司直」詩に「豫章翻風白日動」（豫章風に翻りて白日動く）とあることを指摘する。杜詩句の意は、楠の大木が風に翻って太陽が動き出すということであり、豫章が優れた材であることを証明している。巨大な建物に必要な豫章であるが、豫章つまり梁は、聖人が天下を家と見なした場合の賢材・賢人に匹敵する。受号者にも梁の如く賢人になって欲しいことを願っている。

東沼周巖は「雲崗説」（『流水集』巻五）で次のように述べている。

其脊嶽而凌雲者崗。故蓬萊雲見于封禪書、泰山雲見于公羊傳、廬山雲見于李太白詩、劍閣雲見于杜少陵句。然則山之時義、又遠矣哉。

其れ脊嶽にして雲を凌ぐ者は崗なり。故に蓬萊の雲は封禪書に見え、泰山の雲は公羊傳に見え、廬山の雲は李太白の詩に見え、劍閣の雲は杜少陵の句に見ゆ。然れば則ち山の時義も、又た遠きかな。

ここでは「雲崗」号を付けるに当たり、先ず雲をも凌ぐ山脈を「崗」と言うことを踏まえた上で、雲にも種類が存することを言う。『史記』「封禪書」には三神山の一つとして蓬萊山があり、蓬萊雲はその山に出る雲のことを言う。泰山雲は、『公羊傳』僖公三十一年に「觸石而出、膚寸而合、不崇朝而遍雨乎天下者、唯泰山爾」（石に觸れて出で、膚寸にして合し、朝を崇へずして遍く天下に雨ふるは、唯だ泰山のみ）とあり、廬山雲は、李白の「望廬山瀑布水二首」詩に「半灑雲天裏」（半ば灑ぐ雲天の裏）とあり、劍閣雲は、杜甫の「野老」詩に「長路關心悲劍閣、片雲何事傍琴臺」（長路 關心 劍閣を悲しみ、片雲何事ぞ 琴臺に傍ふ）とあることを列挙する。杜甫の詩に限っていえば、故郷

が劍閣によって隔てられており、そこに一片の雲が寄り添っていることを詠じている。いずれの用例も、それぞれの山における時の意義を奥深いものとしている。こうして「雲」と「崗」の意を格調高くし、受号者が名を轟かすほどの人物として大成することを願い、「雲崗」号を付けている。

東沼周巖は「芳裔説」（『流水集』巻五）で次のように述べている。

十客之徒、頼之以芳。是皆花之載於譜者也。其方於人也、亦然。太白之李其氏、杜甫之浣花其号、聖俞之梅其系、以其詞華文藻、流芳唐宋。唐宋騷雅國也。然則此数君子之属、可謂名花之流亜、而嘉卉之后裔也。

十客の徒、之を頼るに芳を以てす。是れ皆な花の譜に載する者なり。其れ人に方ぶるや、亦た然り。太白の李は其の氏、杜甫の浣花は其の号、聖俞の梅は其の系、其の詞華文藻を以て、芳を唐宋に流す。唐宋は騷雅の國なり。然れば則ち此れ君子の属を数ふるは、名花の流亜にして、嘉卉の後裔と謂ふべきなり。

十種の花は、芳しいのを特徴として名高いのであり、それは、人間においても同様であることを言う。太白の李は氏、杜甫の浣花は号、聖俞の梅は系が、それぞれ詞華文藻によつて唐宋に立派な名声を広めている。このように名花が芳しさを特徴として伝えられるように、人も芳しい、つまり優れた詩文を残すことでその名が後世に伝えられることをいい、「芳」と「裔」の重要性を説き、「芳裔」号を付与している。

以上のように、中期においては主として杜詩句を利用して字号を付けること、さらには字義を解説することが屢々行われていた。杜詩が研究され、杜詩句に対する理解が深まり、字説に援用することが増えたのであろう。号は禅僧個人にとつて大きな関心事である。その号に杜詩句を用いることは、禅僧が杜詩を高く評価している証拠であると言えよう。

(2) 寺制上の公文書(疏など)

禅林では「住院法語」「小仏事法語」に代表されるように、禅僧が仏法や宗旨について述べたり、死者を追薦するために記した法語や、「疏」「榜」「啓札」といった寺制上実用の公文書が頻繁に製された。それら法語や公文書に杜詩句が引用されることは既に初期より行われていた。

中期においても法語や公文書に杜甫の忠義や杜詩における禅的要素を詠み込むことについては既に考察した。それらの特定の場面に限らず、杜甫の詩句は屢々中期の禅僧に援用されている。

東沼周巖は「孫子敬住丹之雲門」(『流水集』卷二)で次のように詠んでいる。

若耶之溪、雲門之寺、杜少陵所詠非耶。黄湾之木、蒲澗之鐘、蘇子瞻之詩云耳。尚憑尺素、益固同盟。

若耶の溪、雲門の寺、杜少陵の詠ずる所か非か。黄湾の木、蒲澗の鐘、蘇子瞻の詩に云ふのみ。尚ほ尺素に憑りて、益々同盟を固くす。

子敬口孫が丹後の雲門寺に住するに際し、杜甫の「奉先劉少府新畫山水障歌」詩の句に「若耶溪雲門寺」(若耶の溪 雲門の寺)とあり、蘇軾の「發廣州」詩の句に「蒲澗疎鐘外、黄灣落木初」(蒲澗 疎鐘の外、黄灣 落木の初)とあるのを踏まえて述べている。子敬が雲門寺に住するにあたり、杜甫の詩に同じ名の寺が詠出されていることと、蘇軾の詩に同じような土地柄が詠出されていたことを即座に示している。

東沼周巖は「模規外住天龍」(『流水集』卷二)で次のように述べている。

經案統塵、久甘亮座主之隱。琴臺向暮、俄吟杜拾遺之詩。不論上坡下坡、直到等覺妙覺。

經案 塵に続き、久しく亮座主の隱に甘んず。琴臺 暮れに向かひ、俄かに杜拾遺の詩を吟ず。上坡下坡を論ぜず、直ちに等覺妙覺に到る。

規外周模が天龍寺に住するに際し、以前に万寿寺に住持したことを詠んでいる。万寿寺の境致である琴臺が暮れてゆき、杜甫の「琴臺」詩の句に「琴臺日暮雲」(琴臺 日暮の雲)とあるのを俄に吟じると、ただちに悟りの境地に至るとある。杜詩句に何らかの禅観が含まれていると解していたのかも知れない。

東沼周巖は「東山建仁禅寺化淋汗疏」(『流水集』卷二)で次のように述べている。

炎天梅藥、人皆誦簡齋之詩。冷秋菰蒲、孰不願少陵之句。須觀時節、以悟水因。

炎天の梅藥、人皆な簡齋の詩を誦んず。冷秋の菰蒲、孰か少陵の句を願はざらんや。須く時節を觀、以て水因を悟るべし。

禅林で夏安居中に風呂を立てるために費用を募縁する疏が淋汗疏である。陳与義の「題趙少隱清白堂三首其三」詩の句に「炎天梅藥簡齋詩」(炎天 梅藥 簡齋の詩)、杜甫の「熱三首其一」詩の句に「願作冷秋菰」(願はくは冷秋の菰を作さん)とあるように、夏の暑さを忘れさせる詩句を取りあげている。暑さに関して詠った杜甫の詩句を即座に詠出している。

初期において、禅僧が仏事法語を述べるに際して、杜甫の名を直接に詠出することは稀であった。それが中期になると、禅僧は杜甫の名を直接に詠出し、様々な寺制上の公文書に杜詩句を直接に引用するに至っている。

(3) 寮舎や画図に対して

初期では住持の退居寮として認められていた寮舎であるが、中期になるとそれを守る塔主は盟主となって、その門徒、即ち小教団を統制する役割を担うに到り、新たな寮舎が次々と創建されるようになった。こうした背景の中で、軒名を命名したり、寮舎を賛することが行われ、それらに杜詩句が援用されることが屢々存した。義堂周信(一三五、一三八)は「寄題葆光寺依緑詩有序」(『空華

集』卷十)で次のように言う。

癸亥春有近江梵尚上人。訪余京寺夜話、出依縁軒詩。以謂予曰、郷間敝刹称葆光、寔先本師默菴論和尚、以応安年間所創也。今春元章老叔遙名其軒曰依縁。蓋取唐杜少陵詩名園依縁水句。而後前南禅清谿翁、楷書其字并題唐律八句者一篇為賜。

癸亥の春 近江の梵尚上人有り。余を京寺に訪ねて夜話し、依縁軒の詩を出す。以て予に謂ひて曰く、「郷間の敝刹にして葆光と称し、寔に先づ本師默菴論和尚、応安年間を以て創はじむる所なり。今春 元章老叔遙かに其の軒を名づけて依縁と曰ふ。蓋し唐の杜少陵が詩の『名園 緑水に依る』の句に取る。而る後 前南禅の清谿翁、其の字並びに唐律八句を題する者一篇を楷書して賜と為す」と。

近江の梵尚上人が義堂を尋ね、依縁軒に題した詩についてその経緯を話している。始め黙庵周論和尚が郷間にそびえ立つ寺を「葆光」と称し、今年の春になつて元章周郁がその軒を「依縁」と名づけている。そしてその軒名こそ杜甫の「陪鄭廣文游何將軍山林十首」詩の詩句「名園依縁水」(名園 緑水に依る)に由来するという。軒の様子と杜詩句が一致したためであろう。禅を営む場に相応しい名として杜詩句が用いられている。

柏巖繼趙(？、一四八)は「松隱齋」(『水南詩集』)で次のように詠っている。

高人幽隱地、松樹遶茅廬。

宰相山中趣、拾遺溪上居。

高人 幽隱の地、松樹 茅廬を遶る。宰相 山中の趣、拾遺 溪上の居。

ここでは書齋を杜甫の草堂に比している。世俗を超越した人は奥深い地において、松の樹が周りを繞っている茅のいおりに住んでいることを言い、その場所は陶弘景が山中に隠れて国家の大事を図り、杜甫が浣花溪上で国家を案じたところのようであると指摘する。

寮舎の増加に従い、次第に中国から伝わった書院や書齋を中心とする建築様式が増え、書院や書齋の特徴の一つである水墨画や障壁画の需要が強まり、それらに賛詩を付す機会も増加する。杜甫の人間像や杜詩句をモデルにして描出された画図に杜詩句を引用するのは自然であり、その画図の種類については既に論じた^⑧。また杜甫の人間像及び杜詩句を対象として描いていない画図でありながら、杜詩句を引用して賛した例も数多く存する。「蕭湘八景図」や「岳陽樓図」を賛した詩に、杜甫の「登岳陽樓」詩の詩句が屢々引用されていたり、「海棠」図に対する賛に、杜甫の母の名前が「海棠」であり、そのため杜甫が海棠を詩に詠み込まなかったという逸話を引用したりしている^⑨。

他にも惟肖得巖は「琴書之樂齋図序」(『東海瓊華集』)で次のように言う。

陶靖節云、只識琴中趣、何勞絃上聲。其心寓於物不滯於物、逍遙自樂之適、可想見矣。杜少陵云、讀書破萬卷。又云、讀書難字過。幼壯異業、為学次第歟。

陶靖節云ふ、「只だ琴中の趣を識り、何ぞ勞とどめん 絃上の聲」と。其の心物に寓して物に滯らず、逍遙として自樂の適なること、想見すべし。杜少陵云ふ、「讀書 萬卷を破る」と。又た云ふ、「讀書 難字 過ごす」と。幼壯より業を異とし、学を為すに次第に嚴たり。

ここでは『晉書』陶潜伝を引用し、「琴書」の「琴」に言及している。そして杜甫の「奉贈韋左丞丈二十二韻」の詩句「讀書破萬卷、下筆如有神」(讀書 萬卷を破り、筆を下せば神有るが如し)と、「漫成二首」の詩句「讀書難字過、對酒滿壺頻」(讀書 難字過ごすし、酒に對して滿壺頻なり)を引用し、「書」に言及している。両者の言を詠出することで学問を大成することの嚴しさを示し、「琴書之樂齋図」をより際立たせている。

東沼周巖は「扇面贊并序」(『流水集』卷三)で次のように言う。

八八兒之後有樹。樹也不辨厥名。若花而謝者。吁、可惜哉。因摘唐杜少

陵頭白鳥之句、戯題一絶云、

八八兒の後に樹有り。樹や厥その名を弁ぜず。若花にして謝する者のごとし。吁、惜しむべきかな。因りて唐杜少陵の頭白鳥の句を摘みて、戯れに一絶を題して云ふ、

扇面に九官鳥と名前の不明な木が描かれていたのであろう。花を見てもいつかはしほむものであることを嘆き、杜甫の「哀王孫」詩の句に「長安城頭頭白鳥」（長安城頭頭白の鳥）とあるのを想起した上で、絶句を詠んでいる。絶句には「花落連朝雨、胡為未白頭」（花落つ 朝雨連なる、胡為すれぞ未だ白頭ならざらん）と言ひ、自身の頭が白髪になり老いたことを嘆いている。

画賛詩であつたと断定することはできないが、光巖老人（生没不詳）は「暁江解纜」（『建長寺龍源菴所蔵詩集』）で次のように詠っている。

江村借宿近漁家、暁解鷗辺弱纜斜。

霧樹難分春岸濶、関情杜甫老年花。

江村に借宿すれば漁家近し、暁に解す鷗辺弱纜の斜めなるを。霧樹分ち難く春岸濶し、関情す杜甫老年の花。

明け方の江で、岸に繋いでいた舟の紐を解き出発する様子が描かれていたと解した。霧に包まれた樹が区別しがたい様子を見て、杜甫の「小寒食舟中作」詩に「春水船如天上坐、老年花似霧中看」（春水 船は天上に坐するが如く、老年花は霧中に看るに似たり）とあるのを想起している。杜甫の最晩年の作品で、舟に乗って旅するのに、その乗り心地が天上に坐しているようであり、老いた目には花が霧の中で散っているように見えることを詠んでいる。

同様に画賛詩とは断定できないが、心田清播は「五橋春水」（『聴雨外集』）で次のように詠じている。

工部詩中第五橋、園臨緑水竹蕭々。

眠鷗宿鷺旧相識、十頃玻璃春不揺。

工部が詩中第五橋、園は緑水に臨み竹蕭々。眠鷗宿鷺旧きより相識り、十頃玻璃春揺るがず。

前半部で、杜甫の「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」詩の句に「不識南塘路、今知第五橋。名園依緑水、野竹上青霄」（識らず南塘の路、今知る第五橋。名園緑水に依り、野竹青霄に上る）とあるのを踏まえている。後半部では、春のどかな景色が詠まれている。心田は建仁寺僧であり、「第五橋」（五条大橋）は建仁寺の境致であることから、画図題と言うよりは実景を詩題としている可能性の方が高いかもしれない。が、いずれにせよ「第五橋」より想起されたのは杜甫の詩句であつた。

柏巖繼趙は「鳳雛」（『水南詩集』）で次のように詠っている。

瑞図可必自天傳、阿闍巢高傍母眠。

鞠養誰同浣花杜、心當竹実血甘泉。

瑞図必ず天より傳ふべし、阿闍巢高く母を傍にして眠る。鞠養するに誰か浣花の杜と同じうせん、心は竹実たぐれに當たりて甘泉を血ふ。

吉祥を示す鳳凰の雛が母に寄り添って眠っている様子が描かれていたのである。その眠っている様子を詠出するのに、杜甫の「絶句漫興九首其七」詩に「沙上鳧雛傍母眠」（沙上の鳧雛母に傍ひて眠る）とあるのを引用している。

以上のように、寮舎に命名したり賛したりする場合や、画図に着賛する場合に、それらに関連する杜詩句を援用することが頻繁に行われている。中期に至ると、禅林社会が変化し、様々な様式が生まれた。寮舎の普及に伴った水墨画図の流布もその一つである。それらの変化に応じて、杜甫の人間像や杜詩句が引用されるようになり、その頻度は非常に高い。杜詩が禅林に浸透していた証拠といえよう。

（4）読後感懐詩

初期禅僧の中で杜甫とその詩を考究対象として最も多く取りあげていたのは、中巖圓月である。中巖は自身の作品の詩題に杜甫の名や杜詩の存在を明記した^④。その傾向は中期にも継承され、義堂周信は「讀李杜詩戲酬空谷応侍者」

（『空華集』卷七）、惟肖得巖は「讀樂遊園詩」（『東海瓊華集』）、一桂老人（生没不詳）は「讀杜甫麗人行」（『一桂老人詩』）・「書杜陵端午賜衣詩後」（『建長寺龍源菴所藏詩集』）、一曇聖瑞（生没不詳）は「讀杜甫洗馬行」（『幽貞集』）等を製し、その内容に杜甫の困窮や忠義を詠み込んだ^⑤。

義堂は「人日偶讀杜詩有感復用前韻呈陽谷」（『空華集』卷八）でも次のように詠じている。

子美生涯二頃園、飢寒如此豈能堪。

每逢人日梅華發、便有草堂詩興含。

萬里江湖魚脱筍、百年塵土蛤投籃。

菜羹頼有厨人辨、同啜休分辣與甘。

子美が生涯二頃の園、飢寒此の如し豈に能く堪へんや。人日に梅華の發くに逢ふ毎に、便ち草堂の詩興含まる有り。萬里の江湖魚筍を脱し、百年の塵土蛤籃に投ず。菜羹頼に厨人の辨ずる有り、同啜して辣と甘とを分かつことを休めよ。

義堂は人日・正月七日に杜甫の詩を読み、感銘を受け、陽谷に詩を呈している。第一句では杜甫の「甘園」詩の句に「春日清江岸、千甘二頃園」（春日清江の岸、千甘二頃の園）とあるように、廣徳元年に柑園を経営していたことを指摘し、生涯に僅かな柑園しか経営していなかったため、飢寒に堪えられないはずがないであろうと同情している。そして毎年、人日に梅の花が開くのを見て、杜甫の詩興が自分にも起こることを述懐している。

心田清播は「讀賈至舍人早朝大明宮詩」（『聽雨外集』）で次のように詠っている。

大明曙漏競朝天、傳册舍人裁此篇。

鼓吹李唐三百載、陽春和入少陵絃。

大明の曙漏 朝日を競ふ、册を傳ふる舍人 此の篇を裁す。鼓吹す 李唐の三百載、陽春 和して入る 少陵の絃。

これは賈至の「早朝大明宮」詩を読んだ後に感懐を詠った詩である。大明宮に朝の光が漏れると、みな天子に謁見することを競う。そして舍人である賈至が大明宮について詩を詠むと、その詩には李氏の唐の榮華が三百年続くことを主張しており、暖かい春に、杜甫も賈至の詩に和したという。賈至の原作には杜甫の他に王維や岑参が唱和しており、いずれも杜甫の詩集に採録されている。

このように読後の感懐を述べた詩を「読后感懐詩」と呼ぶことにする。中期になると多くの禅僧が「読后感懐詩」を製するようになる。初期では外集を読むことさえ規制され、ましてや自身の詩文に外集に関連することを直接に詠出することは極めて稀であった。それが中期になると、詩題に直接に杜甫の名を出し、内容に杜詩句を引用しながら、自らの感懐を述べるといったことが認められてくる。これは深く文章観に関わる問題でもあるが、杜詩に関していえば、細部の考究が進み、深く解釈することができるようになった結果であろう。

（5）武家社会からの要請

禅林社会は既に初期より武家社会と密接な関係を持っていた。禅僧は庇護者である武家の仏事・法語を担当し、彼らの意に合った文章を製さなければならなかった。中期以降もさらに武家社会との関係が深まった結果、その影響で愛好されるに至った杜詩も存する。

瑞溪周鳳（二二九～二四七）は「画鷹二首並序」（『臥雲稿』）で次のように述べている。

鳥之勇者曰鷹也。大可以攫孤兔。小可以逐鳥雀。凡養之者、所以備于田

獵也。然画鷹無搏擊功、間有愛焉者何也。蓋挙娛玩耳。杜陵詠鷹多矣。無真画見于集中。後人述其意曰、嫉悪剛腸、尤思排擊。然則非向所謂曰獵也。娛玩之類焉。其意深矣。伊勢勢州守、早輔府君、而忠義超于先烈。國勢之所係、名称其實。亦豈無嫉悪思擊之意哉。近得画鷹、命予賦之。係以小絶。

鳥の勇なる者を鷹と曰ふなり。大なるは以て孤兔を攫るべし。小なるは以て鳥雀を逐ふべし。凡そ之を養ふ者、田獵に備ふる所以なり。然れば画鷹は搏擊の功無く、間に焉を愛する者有るは何ぞや。蓋し娛玩を挙ぐるのみ。杜陵 鷹を詠ふこと多し。真の画無く集中に見ゆ。後人其の意を述べて曰く、「嫉悪剛腸にして、尤も排擊を思ふ」と。然れば則ち向の所謂る獵と曰ふに非ざるなり。娛玩の類なり。其の意深し。伊勢勢州の守、早く府君を輔け、忠義は先烈を超ゆ。國勢の係る所、名は其の実に称ふ。亦た豈に嫉悪思擊の意無からんや。近ごろ画鷹を得、予に命じて之を賦さしむ。係るに小絶を以てす。

瑞溪は、生き物としての鷹は大きければ狐や兔を捕獲し、小さければ鳥や雀を捕獲するのに対し、画図に描かれた鷹は功績もないのになぜ愛好されるのかを説く。瑞溪は、画図の鷹は楽しみ弄ぶものにすぎないが、それを見ると、悪を憎み、ものに屈しない心が強く湧き起り、悪を最も排撃して退けたかと思うようになるという。幕府の財政を預かる政所執事の伊勢守成親は若くして府君・足利義政を補佐し、その忠義は先祖の偉勲を超えており、画図の鷹のように悪を憎み斥けたいと願っていると称揚する。このように武士は、画図に描かれた鷹を嗜好しており、同じように過去に「画鷹」を愛し、悪を憎みつつ多くの詩を製した人物として杜甫を挙げている。続く小絶・七言絶句には次のように詠っている。

奇毛黄白巧為紋、不混尋常鷲鳥群。

今日武門師尚父、飛揚相共入青雲。

奇毛 黄白にして巧みに紋を為し、混ぜず尋常の鷲鳥の群。今日武門尚父を師とす、飛揚すれば相共に青雲に入る。

前半は、杜甫の「贈特進汝陽王二十韻」詩の句「奇毛或賜鷹」（奇毛 或いは鷹を賜ふ）を引用し、鷹が普通の強い鳥とは異なることをいう。その上で、今日武門において成親が貴き父祖を師とし、鷹のように飛び上がり、立身出世することを期待している。

このように禅僧は武家の意に適合することを最優先にして詩文を詠んでいる。鷹は武家の愛好の対象として存在し、そのため鷹を詠んだ杜詩が尊ばれるようになったのである。

（6）詩文における当意即妙

中期以降も、杜詩句と同様の場面が眼前に現れると、即座にその詩句を詠じ、自身の博識ぶりを周囲に披露することは屢々見られる。義堂周信は、「人日、患目不赴詩筵戲作謝之」（『空華集』卷一）で次のように詠っている。

年年此日惜年芳、幾欲題詩効草堂。

今日梅花応笑我、眼昏看不到宮糞。

年年 此の日 年芳を惜しみ、幾こひわがはくは詩を題して草堂を効はんと欲す。今日 梅花 応に我を笑ふべし、眼は昏く 看るも宮糞に到らず。

人日・正月七日に、義堂はどうやら宿疾である眼病（「空華」の号はそのため）が悪化していたか、詩筵に赴くことができなかつたようである。そこで戯れに詩を製し、毎年人日の日に春の美しい花を惜しみ、杜甫の「人日二首其二」詩に「此日此時人共得、一談一笑俗相看」（此の日 此の時 人共に得、一談一笑俗相看）とあるのを模倣していたのに、今年眼を患ったために楽しむことができなことを詠んでいる。人日と聞いて想起されたのが杜甫の詩であ

つたことが窺える。

義堂は「贈儔上人詩卷後序」で次のように述べている。

昔者東漢馬臻、為會稽太守。築塘畜水者、周廻三百里、佳山秀水、互相映發、若鏡涵物象。故王内史有言、從山陰路上行、如在鑑中遊。逮于李唐天宝間、集賢學士賀知章、字季真、自号四明狂客者、乞歸為道士、敕賜鏡湖一曲。由是文人詩叟、往往形於賦詠。若杜少陵曰、越女天下白、鑑湖五月涼、李謫僊則曰、鑑湖三百里、菡萏發荷花。而後、鑑湖之名、遂播天下矣。

昔者東漢の馬臻、會稽の太守と為る。塘を築き水を畜ふ者、周りは三百里を廻り、佳山秀水、互ひに相映發し、鏡の物象を涵すが若し。故に王内史に言ふこと有り、「山陰の路上に従ひて行けば、鑑中に在りて遊ぶが如し」と。李唐の天宝間に逮びて、集賢學士の賀知章、字は季真、自ら四明の狂客と号する者、歸りて道士と為らんことを乞ひ、敕して鏡湖の一曲を賜ふ。是に由りて文人詩叟、往往に賦詠に形る。杜少陵が、「越女 天下に白く、鑑湖 五月の涼」と曰ひ、李謫僊は則ち、「鑑湖 三百里、菡萏 荷花を發く」と曰ふが若し。而して後、鑑湖の名、遂に天下に播く。

後漢の馬臻が、會稽の太守の時に築いた湖が「鑑湖」の始まりである。その後、王逸少の言辭（『水經注』史部）が発端となり、賀知章が曲を製し、杜甫が「壯遊」詩で「越女天下白、鑿湖五月涼」（越女 天下白し、鑿湖 五月涼し）と詠い、李白が「子夜吳歌」で「鏡湖三百里、菡萏發荷花」（鏡湖 三百里、菡萏 荷花を發す）と詠ったことで世に広まったと指摘する。鑑湖の起源を深く考証していると同時に、杜詩に精通していることが窺える。

心華元棟（生没年不詳）は「寄東光古劍西堂」（『心華稿』）で次のように述べている。

病夫西入作陽、忽歲余、懇無日不在東光和尚左右。近者仰中偶誦儒者杜工

部愚公野谷村、隨水到龍門之語、有感。增以四字、統以二句、以成一偈獻。

病夫 西のかた作陽に入り、忽ち歲余、懇ろに日々東光和尚の左右に在らざること無し。近き者の仰中 偶々儒者なる杜工部の「愚公が野谷の村」「水に隨ひて龍門に到る」の語を誦んじ、感有り。増すに四字を以てし、統くるに二句を以てし、以て一偈を成して獻す。

かつて鎌倉東光寺に住持した病身の古劍妙快和尚が作陽に赴いて一年あまり。一日として和尚の左右身辺に誰もいないという状態はなかった。偶々近くに仕える仰中が杜甫の「贈比部蕭郎中十兄」詩に「愚公野谷村」（愚公が野谷の村）とある句と、「奉留贈集賢院崔于二學士」詩に「隨水到龍門」（水に隨ひて龍門に到る）とある句を誦んじたところ、感ずるところがあった。そのため、各句に二字ずつ附加し、後に二句を附加して一首の偈頌を製し献上したとある。その偈頌には次のようにある。

一 衲愚公埜谷村、更期隨水到龍門。

東光夜半懸紅日、黒漆崑崙失咲奔。

一 衲 愚公が埜谷の村、更に期す 水に隨ひて龍門に到るを。東光 夜半に紅日懸かり、黒漆の崑崙 失咲して奔る。

ここでは暗に作陽を愚公が野谷の村に喩え、鯉が水に従って龍門に至るように、回復して悟得することを期待している。そして悟得の暁には、ここ東光寺では夜半に紅日が懸かって辺りが照らされるために、真つ黒い玉が真つ暗闇の中を失笑して走るといふ。禪語に「黒漆の崑崙 夜裏に走る」（主觀・客觀の対立を超えて真理（本質）と徹底して親密に一体となること）とあるのを踏まえた措辞である。仰中が誦んじた杜詩句を即座に自身の作品に転化している。

龍湫周澤（三〇八、三〇八）は「美木瘦杯文」（『隨得集』）で次のように述べている。

木瘦木瘦恠且奇兮。其形蹙縮材匪卑兮。雖其性正病後魑兮。何止大厦、厩

難支分。未天斤斧、匠棄之分。経品題者、唯杜詩分。(略)

木瘦 木瘦 恠にして且つ奇なり。其の形 蹙縮なれども材は卑しきに匪ず。其の性 正しきと雖も病後 魁し。何ぞ大厦を止め、厩の支え難からんや。未だ斤斧に天れず、匠は之を棄つ。品題を経る者は、唯だ杜詩のみ。(略)

ここでは木瘦は怪奇なものであり、其の形は縮こまっているが材質は悪くなく、大きな家を支えることもできると称賛し、杜甫の「贈王二十四侍御契四十韻」詩に、「長歌敲柳瘦」(長歌 柳瘦を敲く)と詠じられていることを指摘している。木瘦をほめる場面に杜詩を引用しており、木瘦の評価をより高いものにしてている。

絶海中津(二三六、四〇五)は「古河雜言其二」(『蕉堅稿』)で、「杜陵不唾青城地、風土如斯豈復疑」(杜陵は青城地に唾せず、風土 斯の如く 豈に復た疑はんや)と詠じている。杜甫は青城の地を敬愛したが、その風土はこのようであったに違いない、と古河の景色を杜甫が愛好した地に比している。これは杜甫の「丈人山」詩の句「自為青城客、不唾青城地」(自ら青城客と爲り、唾せず 青城の地)を踏まえている。絶海は杜甫の訪れた地と、その地に対する杜甫の思いを把握していたのであろう。

西胤俊承(三五六、四三三)は「立春移梅」(『真愚稿』)で次のように詠っている。

乱後兩京梅發時、春愁漫人少陵詩。

争如林下清朝客、此日看花随意移。

乱後の兩京 梅の發する時、春の愁ひ 人を漫りにす 少陵が詩。争如か 林下に清朝の客たらん、此の日 花を見て意に随ひて移る。

ここで西胤が意識しているのは、杜甫の「江梅」詩の句「絶知春意好、最奈客愁何」(絶だ知る 春意の好きを、最も客愁を奈何せん)であろう。杜甫は春

が来て喜ぶと同時に、不遇なまま時が過ぎ行くことを嘆くことが多いという。西胤も第一句に「乱後」とあるように、不遇な状態で春が到来するのの際し、杜甫の詩とその心境が想起されたのであろう。

惟肖得巖は「蒲隱上巳」(『東海瓊華集』)で次のように詠っている。

蒲隱 飯来惟欲睡、佳辰不復小季思。

山陰高會右軍叙、水上麗人工部詩。(略)

蒲隱 飯り来つて惟だ睡らんと欲す、佳辰 復た小季の思ひあらず。山陰の高會 右軍叙し、水上の麗人工部が詩。(略)

ここでは蒲隱に帰つてきて、三月三日の上巳の感懷を詠っている。そしてその佳き時に当たり、王羲之の「蘭亭序」において「永和九年、歳在癸丑。暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭」(永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、會稽山陰の蘭亭に會す)とあり、杜甫が「麗人行」で「三月三日天氣新、長安水邊多麗人」(三月三日 天氣新たなり、長安水邊 麗人多し)と詠じたことを指摘する。この二人の作品は、日本禪僧の間で親しまれていたようである。

心田清播は「寄北隣梅丈人」(『聽雨外集』)で次のように述べている。

余曰、古之知己者、貴知心。豈以前之所謂往來為知也哉。然老杜詩曰、李

邕求識面、王翰願卜隣。

余曰く、「古の知己なる者、知心を貴ぶ。豈に前の所謂る往來を以て知と為さんや。然れば老杜の詩に曰く、『李邕 面を識らんと求め、王翰 隣を卜さんと願ふ』と。

心田は、往古の知己は心を知ることを貴んでおり、どうして前に往來したことで知己と言えようかと言ひ、一方で、杜甫の「奉贈韋左丞丈二十二韻」詩には「李邕求識面、王翰願卜隣」(李邕 面を識らんと求め、王翰 隣を卜さんと願ふ)とあるのを引用する。梅丈人にその交友のあり方を説くのに杜詩を引

東沼周巖は「才叔佳丈、廼慕洪座元寵弟而群玉称首也。丙子之春、有賀正作、友社競和。一日傳見示。鶯調之律、蝶拍之音、其情可觀也。予雖懶憊、不克無感于懷、擊其節」(『流水集』卷三)で次のように詠っている。

家聲赫赫到君加、宛似應龍生羽嘉。

衣濕碧桃天上露、寧題杜老感時花。

家聲 赫赫として君に到りて加はり、宛も應龍の羽を生ずるに似て嘉なり。衣濕り 碧桃 天上の露、寧んぞ杜老の時の花に感ずるに題せん。

ここでは康正二年(四五六)、才叔佳丈を始め、多くの同僚が賀正を祝って詩を和したところ、余りの素晴らしさに感心し、それらの詩文を誉めている。その際に才叔を誉め、世にめでたく瑞祥が表れていることを祝う。そして杜甫が戦乱で捕虜になったときに詠んだ「春望」詩の句「感時花濺淚」(時に感じては花にも涙を濺ぐ)を詩句にする必要がないことを言う。眼前には杜甫の詩句とは正反対の光景が存し、いち早くその情況に反応して詠出している。

東沼周巖は「僧麼圓者寄海西天草侍者詩序」(『流水集』卷四)で次のように述べている。

有白鷗一双、水之所淺、渚之所近、葦之所戰、泛然飄然。刷翼楚楚然。莫不中詩意。杜浣花殘生之句耶、黃摩圍以我之吟耶、諱諱哉。

白鷗一雙有り、水の浅き所、渚の近き所、葦の戦ぐ所、泛然として飄然たり。刷翼のごとく楚楚然たり。詩意に中らざる莫し。杜浣花の殘生の句や、黃摩圍 我の吟を以てするや、諱諱たるかな。

ここでは白い鷗の身の置き方を表現し、その処世を称揚している。そして杜甫の「奉濟驛重送嚴公四韻」詩の句に「江村獨歸處、寂寞養殘生」(江村 獨歸の處、寂寞 殘生を養はん)とあるのを踏まえている。杜甫も江村で残りの人生を自然に任せて生きることを詠じており、東沼も白鷗の生き方から、杜甫の詩句が想起されたのであろう。

作者不明であるが、「次韻重投極元丈、并吉・徐二少年」(『雲巢集』)で次のように述べている。

極元尊丈、近有二子、曰永吉君、曰永徐君。此二子者、天生絕奇、而可此老杜所謂徐卿二子者也。其名位也、不可卑微而休云者、亦見之於此二子者耶。尤可健羨矣。極元亦以其詩法、教之二子、二子能得其法也。須此老杜於文武二子者耶。仍借雲字、重投極元丈并吉・徐二少年云爾。詩曰、徐卿二子共超群、美譽亦於吾友聞。不是人間凡種類、應須天上謫仙君。脊令相並内庭草、鴻雁連飛禁闕雲。工部有兒得詩法、名高宗武與宗文。

極元尊丈、近ごろ二子有り、永吉君と曰ひ、永徐君と曰ふ。此の二子は、天生 絶だ奇にして、而して此れ老杜の徐卿二子と謂ふ所の者なるべし。其の名位たるや、卑微にして休すと云ふべからざれば、亦た之を此の二子に見る者か。尤も健羨すべし。極元も亦た其の詩法を以て、之を二子に教へ、二子も能く其の法を得るなり。須く此れ老杜の文・武の二子に於ける者なるべきか。仍ほ雲の字を借りて、重ねて極元丈 并びに吉・徐二少年に投ずと爾云ふ。詩に曰ふ、「徐卿の二子 共に群を超ゆ、美譽 亦た吾が友に於いて聞く。是れ人間の凡種類ならず、応に須く天上の謫仙君なるべし。脊令 相ひ並ぶ 内庭の草、鴻雁 連なりて飛ぶ 禁闕の雲。工部 兒有り 詩法を得さしめ、名は高し 宗武と宗文と」と。

ここでは極元の二人の弟子があまりに優れているため、それを杜甫の「徐卿二子歌」詩に比して述べている。その詩には、「君不見徐卿、二子生絶奇」(君見ずや 徐卿の、二子生れて絶奇なるを)とあり、末句には「異時名位豈肯卑微休」(異時 名位 豈に肯へて卑微して休まんや)とあり、それぞれ徐氏の二人の子が優れていることと、将来の地位が立派であろうことを称している。そして極元の二人の弟子も共に名位・才能に優れ、詩法も極元より得たことを言う。二子が詩法を得たことについて、作者は杜甫にも二人の子供がお

り、その宗文・宗武に杜甫は詩法を教えただろうことも想起している。

瑞溪周鳳は「石竹」(『臥雲稿』)で次のように詠っている。

堂前繡竹小嬋娟、碧黛紅裙日鬪妍。

誰記杜陵曾入(大守)、山庭寂寞麝香眠。

堂前の繡竹 小にして嬋娟たり、碧黛紅裙 日々鬪妍す。誰か記す 杜陵
曾て■に入るるを、山庭 寂寞として麝香眠る。

ここでは先ず堂前の竹が小さいながらも美しく成長していることを言う。それを見ると、杜甫の「山寺」詩に「麝香眠石竹、鸚鵡啄金桃」(麝香 石竹に眠り、鸚鵡 金桃を啄む)とあることが想起され、眼前には同じく寂寞とした山の広場に鹿も眠っていると詠じている。■の空白部分には恐らく「詩」に関する語が書かれていたのではあるまいか。眼前の景色、ここでは石竹を見て杜詩を想起している。

作者不明であるが、「菊詩一首、次南昌老人韻」(『雲巢集』)には次のような二句を詠じている。

靈均孤詠曾愁楚、子美重逢仍臥夔。

靈均 孤り詠ず 曾て楚を愁ふを、子美 再び逢ふ 仍ほ夔に臥するを。

屈原が「離騷」において楚を愁うに際して菊を詠じたことと、杜甫が夔州滞在期に二度菊を見ることができたことを言う。これは杜甫の「夜」詩の句に「南菊再逢人臥病、北書不至雁無情」(南菊 再び逢ふも 人は臥病、北書 至らず 雁は無情)とあるのを典拠にしている。菊の詩を詠じるに当たり、杜甫の詩が想起されたのであろう。

在先希讓(一三五、一四〇三)は「送鳳侍者之信州」(『北越吟』)で次のように述べている。

中上座、將之三川省母、褚帟索語。予適謂童、以杜詩至三川不可到、歸路晚山稠之句、摘以為首句云。

中上座、將に三川に之きて母を省せんとするに、褚帟 語を索む。予適きて童に謂ふに、以て杜詩の「三川には到るべからず、歸路には晚山稠おほし」の句に至り、摘みて以て首句と為すと云ふ。

ここでは杜甫が鄜州に赴く道中の險しさを詠んだ「晚行口號」詩の句に「三川不可到、歸路晚山稠」(三川には到るべからず、歸路には晚山稠し)とあるのを典拠にし、鳳侍者が信州に赴く際の險しさを詠じている。三河国と三川の連想から、杜詩を想起している。

心嶽通知は「慧日山東福禪寺語録」(『心嶽和尚語録』)の小參垂語で「少陵杜工部、早行石上水。補陀觀世音、夜聽海門潮」(少陵杜工部は、早には行く石上の水。補陀觀世音は、夜聽く海門の潮)と述べている。これは杜甫の「彭衙行」詩の句に「早行石上水、暮宿天邊煙」(早には行く 石上の水、暮れには宿る 天邊の煙)とあるのを典拠にしている。

天祥一麟(一三五、四七七)は「題瓶花次韻」(『天祥和尚錄』坤)で「一枝分得滿蹊花、子美詩中黃四家」(一枝 分れて滿蹊の花を得、子美の詩中 黃四家)と詠んでいる。一枝が分かれ、道に花が満ちているのを見て、杜甫の「江畔獨步尋花七絕句」詩の句に「黃四娘家花滿蹊」(黃四娘の家 花蹊に満つ)とあるのを想起し、自身の詩文に援用している。

与可心交は「慈恩寺詩」(『詩軸集成』)で「杜陵野老曾登處、有此一欄風物無」(杜陵の野老 曾て登りし處、此の一欄有りて風物無し)と詠んでいる。これは杜甫に「同諸公登慈恩寺塔」詩があるのを典拠にしている。

以上のように、中期において、状況や場面に応じて杜甫の名を直接に詠出し、自らの当意即妙を披露することは多い。中期になると詩を製する機会が初期と比較しようもないほど増加する。禅僧は各種各様の状況や場面に対応する杜詩句を自身の知識の蓄積の中から選択するわけであり、それによって周囲から自己の杜詩習熟度が問われることにもなる。杜詩は様々な場で援用されること

になったのである。

初期においては、外集文学の受容規制から杜甫の名を直接に詠出することが稀であったが、中期になると規制が緩和され、多くの禅僧が直接に杜甫の名を作品に詠出するようになっていく。禅林社会の変化によって、作品を詠出する機会も増え、それとともにその場に応じた杜詩の援用の要請が高まったのである。各禅僧の杜詩理解が深まり、禅林に広く浸透しているといえよう。

二、杜甫の名が直接に詠出されていない場合

初期においても杜甫の名を詠出せず、詩句のみを引用することが存したが、中期の禅僧も詩文に杜甫の名を出さず、その詩句を引用することがある。例えば岐陽方秀（三六二、四四）は「恒雷山住駿州清見江湖疏」（『不二遺稿』）で、杜甫の「春日憶李白」詩の句「清新庾開府、俊逸鮑參軍」（清新なるは庾開府、俊逸なるは鮑參軍）をそのまま引用し、雷山口恒が杜甫の詩句にあるように、庾信や鮑照のようであることを称賛している。他にも杜甫の名を直接に詠出せず、詩句を引用した例を列挙する。

「飲中八仙歌」

江西龍派（三七五、四四）は「松下醉仙図」（『統翠詩藁』）で「波濤過耳眼花眩、似是知章水底眠」（波濤 耳を過ぎ眼花眩し、是れ知章の水底に眠るに似る）と詠んでいる。ここでは、杜甫の「飲中八仙歌」詩の句に「知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠」（知章 騎馬 船に乗るに似る、眼花 落井 水底に眠る）とあるのを典拠にしている。酒に酔った様子を詠じるのに、杜甫の「飲中八仙歌」は重宝されていたようである。

「兵車行」

在先希讓は「在先和尚住東福禪寺語録」（『在先和尚語録』）の中で、冬至の上堂に際し、「冬至上堂、車轆轤、馬蕭蕭、行人弓箭各在腰」（冬至上堂、車

轆轤、馬蕭蕭、行人弓箭各々腰に在り）と、行列の規律のある様子を詠じている。これは杜甫の「兵車行」の詩句に「車轆轤、馬蕭蕭、行人弓箭各在腰」（車轆轤、馬蕭蕭、行人弓箭各々腰に在り）とあるのをそのまま引用している。

「送高三十五書記」

義堂周信の「次石室韻贈遵敬仲」（『空華集』卷八）では、「男兒老大貴成名、豈可歸休便掩扇」（男兒 老大にして貴くして名を成す、豈に歸休して便ち扇を掩ふべけんや）と詠じている。これは杜甫の「送高三十五書記」詩の詩句に「男兒功名遂、亦在老大時」（男兒 功名の遂ぐるは、亦た老大の時に在り）とあるのを典拠にしている。この詩句は初期においても中巖圓月が愛好していた詩句であり、中期でもその傾向は継承されているようである。

「曲江」

「曲江」詩から引用している詩がさらに存する。龍湫周澤は「又悼晦谷」（『隨得集』）で「寸腸欲寫無新句、一片花飛減却春」（寸腸 寫さんと欲すれども新句無し、一片 花飛びて春を減却す）と詠んでいる。これは杜甫の「曲江」詩の句「一片の花飛びて春を減却す、風飄りて萬點 正に人を愁へしむ」を典拠としてしている。時節の変化はどうすることもできず、人間もいつかは亡くなることを言う。

また南江宗沅は、失題（『作品拾遺』）の詩であるが、「七十古稀休問天、只

須乗燭夜沈遣」(七十 古より稀にして天に問ふを休めよ、只だ須く燭を乗りて夜沈に遣るべし)と詠んでいる。これは杜甫の「曲江三章章五句」の、「自斷此生休問天」(自ら此の生を断ず 天に問ふを休めよ)と、「曲江」詩の「人生七十古來稀」(人生 七十 古來より稀なり)を典拠にしている。七十歳になって既に達観していることを詠するに際し、「曲江」詩を引用することは常套の手段であつたようである。他にも心田清播は「招江南文侍者」(『心田詩藁』)で「七十人生五十稀、与君相見良相違」(七十の人生 五十稀なり、君と相見るも良に相違ふ)、さらに「招江左故人」(『春畊集』)で「夢蝶人生七十稀、芳辰樂事巧相違」(夢蝶 人生 七十稀なり、芳辰 樂事 巧みに相違たり)と詠じている。「曲江三章章五句」の詩句「自ら此の生を断ず 天に問ふを休めよ」を引用した例としては、惟肖得巖が「和洙遜二上人樓望之韻」(『東海瓊華集』)で、「五十此生休問天、沙頭小隱擬巢仙」(五十の此の生 天に問ふを休む、沙頭の小隱 巢仙に擬す)と詠んでいる。自分が隠居する場面を詠んだものであろう。

「春望」

東沼周巖は「牧松軒軸」(『流水集』卷三)で、「巍然十八公、養得策何功。国破山河在、金華仙宅東」(巍然たる十八公、養ひ得て何れの功を策す。国破れて山河在り、金華 仙宅の東)と詠んでいる。高くそびえた松を見て、絶えず運行を続ける自然を感じ取り、杜甫の「春望」詩の首聯「国破山河在、城春草木深」(國破れて山河在り、城春にして草木深し)を想起している。

東沼周巖は「送走義天侍者師喪」(『流水集』卷三)で「祇合三春濺花涙、屋梁残月旧時顔」(祇に三春に合し花に涙を濺ぎ、屋梁 残月 旧時の顔)と詠んでいる。これは杜甫の「春望」詩の領聯に「感時花濺淚、恨別鳥驚心」(時を感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥にも心を驚かす)とあるのを典拠にしている。三度の春が過ぎ、文字通り時節の変化を感じたのであろう。同

様に、「春望」詩の領聯を意識したものに、作者は不明であるが、「和韻看花有感」(『雲巢集』)でも、「憶着曾遊都是夢、看花濺淚鳥驚心」(憶着す曾て遊ぶも都て是れ夢なり、花を看て涙を濺ぎ 鳥は心を驚かす)と詠じ、天祥一麟は「再次櫻花韻」(『天祥和尚録』坤)で、「鳥也驚心花濺淚、鼎湖龍去已先皇」(鳥も也心を驚かし花は涙を濺ぐ、鼎湖 龍去り 已に先皇)と詠じ、桃隱玄朔は「佛涅槃」(『桃隱集』)で「三五夜愁花濺淚、二千年恨鳥驚心」(三五夜の愁ひ 花は涙を濺ぎ、二千年の恨み 鳥は心を驚かす)と詠んでいる。「一百五日夜對月」

義堂周信は「迎秋樓」(『空華集』卷一)で次のように詠じている。

諸老登臨興正闌、十分爽氣滿人間。

是誰斫卻月中桂、風露蟾宮夜不閑。

諸老 登臨して興は正に闌なり、十分の爽氣 人間に滿つ。是れ誰か月中の桂を斫卻せん、風露 蟾宮 夜 閑せず。

諸老が秋迎樓に登り、興はまさに酣であることを言う。そして、周りを見やれば爽快な気が十分に人間に満ちており、月の中の桂を切り倒す必要がないとし、風は吹き露は降り月は輝き、夜が過ぎていくと述懐する。この第三句は杜甫の「一百五日夜對月」詩の「斫卻月中桂、清光應更多」(月中の桂を斫卻せば、清光 應に更に多きなるべし)を典拠にしている。美しい月を見て想起されたのがこの杜詩句であつたのであろう。

「徐卿二子歌」

南江宗沅(一三六七—一四三三)は「和良少年試筆韻」(『作品拾遺』)で次のように詠んでいる。

京国春生詩趣多、山容鳥語覺微和。

欲酬年少風流句、只有徐卿二子歌。

京国 春生じ 詩趣多し、山容 鳥語 微かに和するを覺ゆ。年少の風流の

句に酬いんと欲す、只だ徐卿二子の歌有るのみ。

都での春に少年と詩を和するに際し、第四句で少年の優秀ぶりを称揚するが、杜甫の「徐卿二子歌」詩のようであることを言う。その詩には、首句に「君不見徐卿、二子生絶奇」（君見ずや徐卿の、二子生れて絶奇なり）とあり、徐氏の二人の子が優れていることが詠われており、南江も良少年をそれに比したのであろう。杜甫の「徐卿二子歌」は、優れた子供を称揚する際の一つの典拠として認められていたのであろう。

「旅夜書懷」

惟忠通恕（？一四三九）は「天地一沙鷗」（『雲壑猿吟』）で、「天地一沙鷗、機心萬事休」（天地の一沙鷗、機心萬事休む）と、無力な存在である天地に漂う一羽の鷗のような私には、偽り巧む心はすべて無くなってしまったと詠じている。これは杜甫が成都を離れ、職を諦めたときに詠じた「旅夜書懷」詩の句に、「飄飄何所似、天地一沙鷗」（飄飄何の似たる所ぞ、天地の一沙鷗）とあるのを典拠にしている。惟忠は当時の心境を杜甫の心情に重ね合わせたのであろう。

「古柏行」

太白真玄は「芳草堂住浄妙」（『峨眉鴉臭集』）で「大椿八千歳為春、成器晚矣。古柏四十圍溜雨、取材難哉。苟非間世偉人、焉任山重命」（大椿は八千歳を春と為し、器を成すこと晚し。古柏は四十圍にして雨を溜らせ、材を取ることに難きかな。苟くも間世の偉人に非ざれば、焉ぞ山に任じ命を重んぜん）と述べている。大器晩成のことを述べており、その際に杜甫の「古柏行」詩の句「霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺」（霜皮雨を溜らす四十圍、黛色天に參ず二千尺）を引用して、論じている。

心田清播も杜甫の「古柏行」詩の句を踏まえ、「辛丑冬過湖上、吹江西老友句」（『聰雨外集』）で「神龍閉蟄尋常水、老柏凌寒四十圍」（神龍閉蟄尋

常の水、老柏寒さを凌ぐ四十圍）と、江西龍派が隠居されたことを神龍に比し、そして益々尊厳さを増したことを老柏に比している。

「登高」

義堂は「又和答少室兼簡芳庭」（『空華集』卷三）で、「禪餘對客揮談塵、不尽長江袞袞來」（禪餘客に對して談塵を揮へば、不尽の長江袞袞として來る）と詠じている。これは杜甫の「登高」詩の句「不盡長江袞袞來」（不尽の長江袞袞として來る）を典拠にしている。

以上のように、杜甫の名を直接に詠じなくとも、杜詩句のみを援用する場合が存する。ここで挙げた例は一部にしか過ぎない。当事者であった禅僧にとつては、たとえ杜甫の名が詠出されていなくてもその出典が即座に把握でき、当意即妙の詩句に對して感嘆したり、励まされたり、光榮に思ったりしたのであろう。これらのことより杜詩が多くの禅僧の間で広く深く読まれていたことが察せられるのである。

まとめ

初期において杜詩は、既に字号や上堂法語に利用され、場に応じて当意即妙の素材として用いられていた。しかし、その様相は、字号や上堂法語の場合、直接に杜甫の名を詠出することは稀であり、場に応じて杜詩句を詠出したのは夢巖祖応や中巖円月といった禅僧に限られていた。

中期になると、初期の傾向を継承しながら、その様相は格段に変化している。字号や上堂法語に杜詩を利用する禅僧が増え、直接に杜甫の名を詠出している。これは杜詩が仏典に準じるものとして認められ、初期にも増して外集の中でも特別な存在として見なされていた証拠であろう。またその場の状況に応じて杜

詩を詠出する禅僧は非常に多い。外集文学に対する受容規制が緩和されたことに起因するが、それだけでなく多くの禅僧が当意即妙に援用することができたのであり、杜詩が禅林社会に一層深く浸透していたと言えよう。

中期では杜甫の人間像及びその詩が禅林に深く浸透し、様々な場面で利用されている。初期ではその受容がまだ希薄であったが、それは中期になって深化し、全盛を迎えるのである。

【注】

- ① 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―禅の宗旨と文学観の連関をめぐって―」（『禅から見た日本中世の文化と社会』ペリカン社・二〇一六年）参照。
- ②⑬ 拙稿「日本禅林における杜詩受容について―中期禅林における杜甫画図賛詩に着目して―」（『中国中世文学研究』第四十五・四十六号合併号・二〇〇四年）参照。
- ③ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―中期における杜甫の情に対する関心―」（『広島商船高等専門学校紀要』第二十九号・二〇〇七年）参照
- ④ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―忠孝への関心（中期の場合）・詩文詠出の様相―」（『中国中世文学研究』第六五号・二〇一五年）、拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―忠孝への関心（中期の場合）・解釈の様相―」（『富永一登退休記念論集 中国古典テキストとの対話』研文出版・二〇一五年）参照。
- ⑤ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―中期における杜甫の困窮像について―」（『愛媛大学教育学部紀要』第六三卷・二〇一六年）参照。
- ⑥ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―杜甫と自然の關係に着目して（中期の場合）―」（『愛媛大学教育学部紀要』第六四卷・二〇一七年）参照。
- ⑦ 拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―禅的要素に着目して（中期の場合）―」（『愛媛大学教育学部紀要』第六〇卷・二〇一三年）参照。

―」（『愛媛大学教育学部紀要』第六〇卷・二〇一三年）参照。

⑧⑨⑭ 拙稿「日本禅林における杜詩受容―初期における応用と流布―」（『中国学研究論集』第八号・二〇〇一年）参照。

⑩ 前掲④⑦参照。

⑪⑯ 拙稿「日本禅林における杜詩受容―禅林初期における杜詩評価―」（『中国中世文学研究』第三九号・二〇〇一年）、拙稿「日本禅林における杜詩受容―忠孝への関心（初期の場合）―」（『中国中世文学研究』第四〇号・二〇〇一年）、前掲⑧参照。

⑮ 前掲④⑤参照。